

蓑笠記（前號のつゞき）： 雜録

著者	東籬園樵夫
雑誌名	龍南會雜誌
巻	4 1
ページ	3 7 - 4 6
発行年	1895-12-17
その他の言語のタイトル	蓑笠記（前号のつづき）： 雜録
URL	http://hdl.handle.net/2298/4724

蓑笠記

(前號のつゞき)

東籬園樵夫

山の寺ハ天童町を去る三里東の方山中にあり山形縣内唯一の勝地と稱せらる殊に清和帝の敕許により慈觀大師の開山に係はる法窟なるを以つて其の名高き。(貞觀二年の開基なりとは天童古事記の云ふ處)

此日天氣快晴、蒼穹一片の浮雲なき。熱度隨て強く一步一喘甚だ苦む。然れども午時過ぐる頃、山寺村に達するを得たり。乃ち一茶店に憩ふて晝飯を喫え、將に出で、山の寺に登らんとす。途にして多喜澤、伊藤、倉山の三君に邂逅し、共に相携へて登る。登口に數道あり。其東よりするものを順なりと聞く。乃ち先づ中堂を觀、清和帝の御塔を拜え、石階を傳へ、漸やく進んで遂に奥の院に達し歸路に就く。

清和帝御塔の前に一碑あり。左の和歌を刻せり。

閑さや岩にしみ入る蟬の聲

芭蕉翁

蓋し山寺幽靜の狀僅々十七文字中に網羅して餘蘊なし。是れ又一種的好寫眞。

鬱乎として肅森たる叢林中、一條の階路を傳へて登るに、傍ら姥堂あり。内に白髮鬼顔の老姥、口角朱色を漲らし、開口將さに人を食せんとする風ある木像一ヶを安置せり。生等其何の爲めなるを知らず。閑視し去る。堂の傍ら伏泉湧出し、潺湲聲あり。以て神氣を爽かならしむ。是より右の方又巨碑あり。

ふくかせの竊に寒むしむめの花

靈樹庵立志

の辭世一首を載せたり。尙ほ歩を移して登坂するに山漸く深く、道愈々峻なり。半途に行立して、左瞰

右顧すすれば、窮岡の曲、巨巖懸り、累々重々、手觸るれば將さに落ちんとす。其上老松參差として簇生し、谷風は時に起て萬年の枝を鳴らし、其聲凄愴たるあり。或は岩傾いて行人の頭上を覆ひ、或は險に躋で幽居を築くあり。或は岩石の半腹無數の洞穴を穿つ、其狀恰うも蜂巢に似たるあり。奇景異觀擧げて盡すべからず。其他松柏杉檜の繁茂せる者蔚として日光を留めず。是を以て玄林陰涼、衣襟雨なきに濡はんとするの風情あり。地自うら幽肅、絶えて紅塵喧囂の意を乱るものなし。偶々耳朶に觸るものは、只だ松籟の響きと、樵采の音とのみ。所謂る仙實ならんか。山上の重なる建築物は奥の院、一切經堂、開山堂、二王門、中性院、最上義光公日牌所等なり。此他建物少なからずといへども、爰に用なきを以て省く。

奥の院に至り室物數四を見る。中に佛舍利、五光、三光獨鈷、御朱印（立石倉の印と刻せり。聞説く清和帝貞觀二年、殊に慈覺大師に賜はりしものにして、全國通じて只だ三ツあり。是の印蓋し其一なりと）數球水晶等あり。以上皆大師の遺物に係はり、世を歷ること今に千〇三十四年、傳へて秘藏の寶物となすと云ふ。恨むらくは生等共に淺識未だ其信偽を判すべき眼光なきを。

院庭に八ツ房の梅、及び獨鈷清泉と稱するものあり。開山の始め、山中一滴の水を得ず。大師之を憂ひ、念すること三七日にして、自ら獨鈷を手にし、堅巖を穿つに、神妙なるかな清泉涓々として湧出し、今尚ほ盡さず。時人大師の神通方に感じ、清泉を將て法水となし、名付けて獨鈷清泉と云ふ。八ツ房の梅また説なきにあらすといへども、其言ふ處怪誕奇異、徒らに人聽を亂るのみ。故に略す。

山中見るべきもの尚ほ數多ありと聞く。而かも五大堂以西道狹くして險、加ふるに日傾き前程遼遠なるを以て、終に歩を廻らし下山の途に就き、立石寺を過ぎり、同處全圖を購ひ、街道に出で、一意山形

市を望んで急行せり。

十三日 天氣依然として好し。六時旅宿を辞し、市中を觀る。西隅に城趾あり。昔時山形城或ハ大山の城、又後到大寶寺の城といひしもの乃ち是なり。聞く天平年中、大野本人の築く處にして、延文年中に至り、斯波兼賴更らに之を修め、以て居城となせりと。此城今や垣壁池濠を繞らし、關門堅く閉ざせりといへども、内植ゆるに桑樹を以てし、荒楚殆んど見るべきなく、只だ群蛙の氣を得て、更闌に乱たるゝあるのみ。吁嗟痛ましひ哉時運の推移、金殿櫓閣今此の如し。之を想ふに桑田變海の諺いまだ俄かに排すべからざるなり。慨嘆一番、去つて監獄署、縣廳、議事堂、中學校、警察署、師範校、製糸場等を觀、八時頃中學校長中原先生を訪問し、兼ねて帶びし處の紹介狀を呈す。先生時に教室にあり。

山形中學校ハ馬見端川を帶び少しく高燥地に寄て前方に畑を控へ、優に市街、の俗塵を避けたり。居は氣を移すと、孟母三遷の教、豈夫れ偶然ならんや。今偶々感ずる所あり。蓋し本校職員生徒、皆謙讓の風に富める所以のもの、固より教養の然らざる處なりといへ、本校の位置地勢又大に與つて力なくんばあらず。是を市中の他校に比するに、盾にして文に過ぎず、素にして野に失せざればなり。又以て當局者の注意奈何を知るに足る。

燒失地は一見尙は悲酸の風を留め、商賈するもの多くは燼餘の戸障を以て四圍となせ、僅かに品物を店頭に陳列せるあるのみ、工人數多建築に従事すと雖も、未だ軒を連ねて街形を爲すに至らず。憐むべし全盛の故市、今寥々として振はざるを。

山形より米澤に至る里程凡そ拾二里。此間山にあらざれば田、田にあらざれば川なり。是を以て風景愛すべきものありといへども、殊に勝地故跡の尋ねべきなし。念々唯だ道の遠きと思ふて、轉た勞を

覺ゆるのみ。又一ツの樂事なし。否只一ツ快事あり。四月中旬の候、暑熱稍々催ふし、勞者旅人、流汗背を濡はし、口熱して渴に堪へざるるとき、路傍往々にして雪あり。人の取るに任かす。盛夏の候、能く堅氷を藏するものありと雖も、未だ天與の雪を販くものあるを聞かす。然るに今此の賜に遇ふ。其快其味、何物う能く之に及ばん。深山高峰の頂きに至つては中夏尙ほ之れあり。何ぞ更らに珍とするの價值あらんやと、人或は難するものこれあらん。然りと雖も物の貴賤は比較に依て生じ、時と場合に從て定まる。豈春夏の別を論するに違あらんや。此旅行にして此雪あり。生等に取ては實に千金を値すと謂はざるべからず。乃ち記して獨り當時の快を想ふ

此日南館、吉原、片谷地、松原、黒澤、四ッ谷、上ノ山（藤井氏ノ城趾）長清水、藤吾、中山、小岩澤、赤湯、祖柳、福澤、大橋、津雲、糟ノ目等の村落を經由して、點燈時米澤市に達するを得たり。銅屋町を尋ねて高橋六右衛門方に投宿す。疲勞始めて甚だし。夜來雨強く、風荒れ、沈吟眠り得ず。夢屢々破る。

十四日 早起戸を排せば、雨尙ほ滂沱たり。須臾にして益急。嗟呼上天何の心ぞ、敢て雨箭を飛ばして此行を阻む。天高くして問ふべからず。衆乃ち相議して曰く、天譴奈何ども之がたし、如かず、掩留の無聊に苦まんより、雨に浴し風に櫛るの快あらんにはと。則ち行李を整ひ、外套を纏ふて出づ。先づ上杉公の故趾を訪ふ。故趾は市の東南にあり。繞らすに内外の二濠を以てす。其會て牙城たりし處に一社を建て、名付けて上杉神社といふ。餘地を以て公園に當て、市民逍遙の所となせり。地甚だ廣からずといへども、灑掃能く至り、塵芥を止めず、適々以て熱鬧煩襟を洗ふに足る。社の正面に一架橋あり。舞鶴橋と云ふ。怪巖奇石を用ゐて欄干となす。頗る雅趣あり。米澤中學校は公園に傍つて位置を占め、又市中の喧囂を避けたり。校長を阪田氏と呼ぶ。

更らに公園を過ぎり、架橋を渡り、左折して置賜郡役所前に出で、右回左行、徐ろに街衢を觀、郷俗を察し、徘徊數時、終に郊外に達し、漸く寂寥の區境に入る。時恰かも十時、陰雲未だ容易に開くべからずといへども、風伯稍々威を減じ、聲疾きを加へずして、同行相談之相笑ひ行路の難を覺ゆるなきを得るに至れり。途上雑談の裡、衆相語つて曰く、前夜旅宿に見し所の下婢、其態其容、鞍馬山の天狗に彷彿たり。名づけて「こつば天狗」と云ふ。又面白うらずやと。衆皆失笑す。蓋し斯評の起る偶然ならざるものあり。想ふに此地の俗、男女の別なく、悉く穿つに「もんべい袴」を以てし、下婢奴僕に至つては兼て胴袖の上衣を纏ふ。是を以て其態焉然越子獅子なるものに似たり。偶々旅宿の一婢側らに侍して給仕す。服裝頗る奇異、加ふるに徹衣亂髮又禮なく、應答傲然主従の別殆んど轉倒せんとす。而うも憚色なし。愚といはん乎、直と言はん乎。遂に名付けて「こつば天狗」と云ふに至る。評し得て妙。語次市評に及ぶ。之を山形に比するに、恐らく一步を譲るが如し。是より先き、吾人市中を逍遙せるの際、視て以て壯觀の想ひをなせるもの一ツあり。諸學校の整齊華麗是れなり。此の如きは他所稀に見し處、又以て市民の教育事業に厚きを知るに足る。

雑談放吟の裡、覺えず山路に入る。山路幽昧にして以て峻隘なり。乃ち知る、是れ前日聞く處の栗子峠なることを。余前に關山の險を歴、豫かじめ道途の艱澁を想ふ。何ぞ圖らん、身其實境を踏むに及んで所思信に非ならんとは。

峠にかゝるの始め、道未だ甚だ險なりとなさず。唯だ坂路曲折迂回えて、地盤漸く高きを覺ゆるのみ。此の如きもの二里餘にして崎嶇羊腸稍々甚だしく、遂に栗子壓道に至て極する。其道程實に三里と稱す。宜なり、生等纖弱此險に當て、疲勞殆んど窮困せしや。然りといへども未だ曾て見ざるの山、未だ

曾て經ざるの地を踏む、其壯其快幾許か吾人の胸襟を潤大ならしめ、志氣を高邁ならせめたるぞ。古人言ふあり、眞の快樂は窮苦の裡に存すと。斯言誠に所へあるなり。

往昔米澤より福島に通ずる道二條あり。坂谷峠笹谷峠是なり。是等道路險なるに加ふるに迂遠不便の煩ひあり。新たに開道せんら、高峻四塞の地、元より莫大の費を要せ、數多の年數と幾多の苦難を積まざるべからず。而して其費其勞決して縣民の負擔し得べからざるを知る。是を以て新道開鑿の議、時に縣會を動かせしことなきにあらずと雖も、成功期すべからざるものを恐れて、未だ決行するの運に至らず。偶々剛膽の聞へある三嶋通庸君、令尹の職を奉じて山形縣に入るや、乃ち縣會を擁して縣民に論說し、百方を地方に盡して以て之が斷行を成せりと云ふ。其事又偉なりと謂ふべし。

米澤よりするものは、五里の峻坂を攀ち、五里の坂路を下つて、遂に中野村に出で、飯坂を過ぎり、長岡停車場を横斷して以て福島に達すべきなり。生等一行又道を是に取る。

李太白曾て蜀道の難を説て曰く、噫吁戲危乎高乎蜀道の難難於上青天と。生等また此感なきを得ざりき。蓋し栗子峠の道たるや、恰かも螺旋の如く、登るに従て漸く天と咫尺す。半途にして停立俯仰すれば、下に廻谿あり。水聲聒々として清音耳に徹し、上は嶺頭雲煙に入て白雪堆々、四圍連峯屏立して吟眸通せず。身壺中にあるが如く、天小なり。更らに歩を起して邱壑を攀づるに、雪の徑路を没して進むに道なく、宵とて殆んど迷はんとす。幸にして迷ふことなきを得しは、電柱の常に路傍にあつて吾人を導けばなり。偶々茅屋一家、深谿に臨み傾巖に倚つて立てたるを見る。近づいて前路を問はんと欲するに、軒は低く垂れて入口を蔽ひ、戸は半ば鎖さして屋内暗く、人をえて人間の棲否を疑はしむ。同行の一人敢て戸を排し内に入り、呼んで問ふに前路を以てす。果して人あり。聳に應じて答へて曰

く、十五丁にして墜道に達すべし。墜道の入口に松明を賣て業となすもの只一家あり。就て松明を求むべしと。乃ち禮をなして出で來り、之を衆に告げ、且つ一休せんことを計る。衆其意に同し、雪を庭と爲えて憩ふ。時に凍風深く壑中より上り來つて面を撲つ。威力頗る強し。久しく閑座すべからず。再び歩を移して進むこと徐々たり。蓋し積雪固く結んで氷の如く、動もすれば千仞の谷中に顛せんとするの懼あるのみならず、百歩九折の峻坂登り易からざればなり。牛歩も息まざれば千里遂に粟子墜道に達し、一茅家に就て松明を購ふ。松明はばろざれと石油とより成る。之を長柄の棒頭に束ね、點火えて以て獨に代ふる者なり。能く風力に耐ゆ。其墜道に入るの前、之に火を點せんとす。洞中風強ふえて容易に能くせず。簑笠の一旅人あり來つて火を分たんことを乞ふ。乃ち與ふるにマッチを以てす。彼先づ點火し得たり。之を傳へて余人に至る。燭光始めて皆全し。旅人曰く、僕福嶋の産、商用を以て常に米澤間を往來するもの、頗る此邊の地理に熟せり。願はくハ衆と道を同ふするを得て嚮導たらんかと。生等元來、道を地圖に考へ、方向を磁針に確めて進む者、固より導者あるを要せずと雖ども、旅人の厚意豈空ふすべけん。況んや住來人稀なるの山道、殊に雪深くして徑路を没し、動もすれば岐路に迷はんとするあるをや。容易に旅人の言を容れ、衆之に尾えて進む。洞門の長さ實に三町十四間、其中央を以て福嶋山形兩縣の境となせり。中に就き福嶋に属する部分、地に松板を敷ひて凸凹を防ぎ、人馬をえて蹉跌の憂ひなからまむと雖も、山形縣所属の部、開穿の後僅らに地上を平坦になしたるのみなるを以て、旅人蠅を取る者と雖も屢々脚を泥中渚水に没え、或ハ轉々たる岩石に躓くの煩ひなきを得ざりき。然りと雖も、生等の先頭に熟路健脚の嚮導あるあり。何ぞ途に注意するを要せん。衆聲を極めて唱歌し過ぐ。四方鳴應じて耳聾せんとす。導者復曰く衆少しく速かに進め、松明盡くるに近しと。

須臾にして遙に微光を認め、又雨聲を聞く。所謂る雨聲なる者は、洞壁の四方より浸出せし水の滴たる響にして、上よりするものは沛然雨注の如く、側よりするものは涓々泉流に似たり。其微光と見しは乃ち洞門の盡きて外界に開く處、日光の白雪に映じて遠く洞中に反射する光輝なりしなり。

洞門盡くる所積雪重々、或は將に八九尺ならんとす。滿目體々風光蕭條たり。是の時瀕りに空腹を覺ゆ、食を求めんとするに家なし。導者曰く、是より里余にして二子屋に至るべし。佳着なしといへども糲飯飢を愈するに足る者あらん。且つ是より傾斜の道、須らく飢を忍んで進むべしと。乃ち又其言の如くす。雪路滑らうに、傾斜急なり。一たび地を蹴れば身恰かも轎車に乗れるが如く、勞せずして數町を下る。快も亦快。嗚呼前さには何ぞ夫れ苦多くして、後に樂みある斯の如きや。數時ならずして再び壓道に入る。是れ所謂る二子屋洞門なる者、其長さ一町四間、之を過ぐれば民家概ね四五あり。乃ち其善き者に就て晝飯を喫す。黎羹平生口に適せずと雖ども、此時此食美味膏粱に譲らず。是より飯坂温泉に至る。里程三里半と稱す。二時二子屋を辞し、六時半遂に温泉場に着し、花水館に投せり。此日疲勞尤も甚だし。

飯坂は長岡停車場の左十五町の處にあり。町邑廣からずと雖も、温泉地たるを以て又繁盛の風あり。花水館は高きに位置を占め、下は一帶の長江に臨み、江を隔てて青山に對し、風景稍々佳なり。

十五日 眠初めて醒む。未だ床を離れず。時に聴く浚琴憂々の音、仙樂を聞くが如く、意清涼、乃ち起て戸を排し前山を望めば、紫雲心なく岫を出て、禽鳥欣々友を呼ぶ急なり。是の風景の好きに對して、覺閑座吟呻に堪えんや。沐浴先づ衣裙を正ま、盤餐に就き、食後休憩凡そ二十分にして旅舎を出て、長岡停車場を過ぎり、保原町を經、柱田より順路掛田に着し、午飯を食む。

保原町ハ南北に通る一街にして、四隣の農家薪炭米穀を此處に致し、市場を立て競賣を試むるの地とせざるを以て、貨車駄馬街に

滿ち、往來又繁雜なり。掛田ハ爾糸場なるを以て聞ゆ。之を保原に比するに一段繁盛の風あり。

掛田より靈山に通ずるの路間道に迄て到り易からずと聞く。乃ち導者を僱ふて進む。午后二時靈山村に着し、神社に詣づ。社は官幣大社にして、岩代國伊達郡靈山村にあり。高丘に倚て近く靈山城跡と相望む。村落は此麓を遶れり。是を以て優に塵寰を抜いて、社内自ら神聖の風溢る。生等社の側面より登り、社務所前を過ぎ、主として拜殿を見る、尋常の建築に迄て、結構甚だ大なりとなさず。側ら一碑あり、左の二首をのせたり。

君かため心盡せしきみくのみなやハ朽て世にはへぬとも

名にしおふ美靈の山の名もまろくたてし功の高くもあるかな

從七位 紫山 景綱

社務所員小野星那二氏に面々、左の記事を得たり。

福島縣伊達郡靈山村舊大石字小庵館鎮座なる靈山神社の跡は故陸奥出羽の鎮守府大將軍贈從一位大臣北畠源顯家公準三宮北畠源親房公鎮守府大將軍中納言北畠顯信公鎮守府將軍大納言北畠源守親公以上四卿を合祠せしものなり然り而して其創建の源因を略陳するに古跡舊陸奥出羽兩國則今(磐城岩代陸前陸中陸奥羽前羽後)の七州は東陬邊要にまて王化普からざるも元弘延元以降此地方の士民大義名分を明知し南朝の正朔を奉し數々鎌倉の黨與と戦ひ櫛風沐雨斃れて後止むものは何に由て然るや謹て之を按ずるに源親房公源顯家公陸奥大守義長親王則ち後村上天皇を奉し靈山城に在居し陸奥出羽及常陸下野を統治し相次て源顯信公源房親公斯の士民を統御せられ累代勤王忠盡の恩澤に沐浴し忠敬義列の士民南朝の天を載き皇運を挽回せんま百折不撓盡力する所以は北畠公の威風余烈の然らしむるを辯を俟たずして明かなり今夫れ明治維新の隆運に際會し多年追慕感慨の情抑遏する能はず依て本郡有志の輩相商議し四公を神祭して以て赫々たる勤王忠烈を天下に表し毎歲敬慕して祭典を施行し之を無窮に傳へ以て後世子孫をして大義明分を明知せしめんま明治十二年十一月二日當廳へ出願し其許可を蒙むり同十有三年の夏六月より社殿を造營し竣工の上成規の如く明細書を捧呈し同十五年六月一日勸請式を執行し爾來四月廿二日を以て本祭日とし前後合せて三日間を例祭日と定め大祭典を執行す云々

右は立談の間に得たる梗概に過ぎずと雖ども、又以て社殿建立の由來する所を知るに足る。尚は一記

事あり。曰く、

岩代國伊達郡舊稱石田村なる靈山は抑 入皇九十五代後醍醐天皇の御宇賊徒處々に峰起し天下頗る紛擾の際鎮守府大將軍參議北
畠顯家及勤王將士共に皇子 義良親王を奉し陸奥國府多賀城に下向し座し後此山に築き天下の大藩塲に當てられ而して兩州の強
徒を鎮定せられし舊跡にして其基礎歴然として今尚ほ顯在す故に郷黨の有志等斯の尊跡を不朽に保存せんか既に建碑の舉あるも
滿天下の有志輩にして 尊跡眞景を實視したるもの又渺ならず爰に眞景を寫行して天下に分つ云々 正三位子爵 白川資訓題
彼此參照、以て其尊跡たるを知るべし。

(未完)

知 己 難

子 飼 橋 守

人心の奥底に一大秘密あり。

天地闊けてより茲に幾千歳、仰き觀れば青山長に動かず、俯えて望めば滄浪常に盡さず。花紅にして
月明に、水清くまて風白し。宇宙何ぞ悠々、乾坤何ぞ玄々。人間此の間に、酔生夢死以て蜉蝣の世
を送る。不幸にして未だ一人の明に己を白狀せるものなく、又精しく他を解知せるものなし。試に問
ふ天下果して眞正の知己ある乎、抑も能く他の秘密を知悉せるものある乎。

誰れか謂ふ知己を後世に俟つと。千年にまて一人の己を解するあり、萬歳にして一人の我を觀るある
や否やを知らず。骨朽ち、名消え、斷草茫茫墳墓を蔽ひ、青苔茸々塋域を鎖すに至りては、よしや熱淚
萬斛を灑いで來り吊するものありとするも、われはた何の慰藉する所ぞ。松籟徒らに天を吹き、皎月
空しく石を照す。思ふて此に至る、人世の果敢なき、誠に人をして恨殺せしむるに足る。而して古來此
恨を吞むで黃塵に歸したるもの如何に多きかを思へば、われ實に斯世の樂しきを疑はざるを得ず。花